

ボルノー教育学に基づく住環境教育に関する基礎研究 —関口家政学の批判的検討から— 後藤さゆり（東京学芸大・連合大学院）

目的：住環境に対する主体的な意識、態度を育成するために、ボルノーが教育人間学の視点から展開した空間論を住環境教育の課題に取り入れることを目的とする。その基礎研究として、ボルノーの理念を基に展開した関口家政学を検討することにより、ボルノーが教育的課題とした人間学的空間の規定を明確にし、住環境教育の課題を明らかにする。

方法：関口家政学を展開している著作を取り上げ、その鍵概念である「人間守護」、「内部空間」、「外部空間」の概念、及び研究方法を、ボルノー教育学の視点から検討する。

結果：関口家政学理論の検討；①関口家政学では、“Geborgenheit”の概念を客体化し、与えられる受動的なものとして捉え「人間守護」と表現した。これに対し、ボルノーの“Geborgenheit”の概念は、人間が自己を開示するための主体性と空間の在り様として現れる問題であり、人間の受動性ではなく能動性を言及している。②ボルノーのいう「内部空間」「外部空間」は、人間が体験している人間学的な空間であるのに対し、関口はそれを社会システムである「家庭生活」「社会生活」として展開した。方法論の検討；関口家政学では、研究により求めた客観的成果を個人生活に当てはめ、一元論的成果とすることを可能としている。しかし、ボルノーの指摘する人間の空間性に対する教育的課題は、人間が空間と一体化し、身体のように受肉することによってのみ認識できる課題であり、客体化された二元的空間では認識できない。以上のことから、住環境教育で主体性を養うためには、人間と空間が同一化している空間を認識し、その空間の持つ“Geborgenheit”の自己開示力に気づき、自ら「内部空間」を広げていくことである。